

対話：さよなら、まいぶん

吉田 泰幸（以下、「吉田」） このセミナーでは毎回、ゲストスピーカーの方にそれぞれ話題を提供していただいた後に、対話のセッションを設けて参加者全体で話をしています。最初に私の方から感想を。「さよなら、まいぶん」という今回のタイトルは私がつけましたが、それだけでこれだけ盛り上がりよかったですと思いました。とはいえ、ただゲストスピーカーにお任せしているだけではなくて、司会として話題を繋げていきたいと思います。

私も赤塚さんが立ち上げたNPOの賛助会員になっています。普段は金沢にいるので、愛知県一宮市の実家に帰省した時には、野点のイベントがあると行ってみたい、スタッフの人に話を聞いたりしています。スタッフというのは赤塚さんの話に出てきた学芸員の他に、実際活動を見てみると、サポートメンバーがたくさんいて、その方々もボランティアベースで運営に関わっています。その方々の大半は犬山市近隣の、赤塚さんの言う第一セクターの職員の方が多い。例えば、某市の教育委員会に勤めている方が、NPOのセミナーでゲスト講師をボランティアでやっている。正直、とても楽しそうに見える。ひょっとしたら本業よりも楽しそうにやっているのではないかな。本業の市の方では、「あいつはNPOのことばかり一所懸命やっている、もっと本業で頑張ってくれないか」という声も聞いたりします。そこでお聞きしたいのは、赤塚さんのNPOでの活動というのは今の「まいぶん」の枠組みでやっていることと重なっていることもあるのですが、なぜNPOでなくてはいけなかったのか、それをまずお聞きしたいですね。

赤塚 次郎（以下、「赤塚」） 僕は愛知県埋蔵文化財センターに勤めていて、どちらかと言うと組織の中では自由な気風を作ってきたという自負はありますが、それでもどうしても、お役所という枠組みからは逃れられない。例えば現地説明会などを実施しようとして、埋文の職員が地域の方を呼んで、周辺の散策しながら、美味しいお菓子屋さんがあったら寄って、そこのおばあちゃんに話を聞いて、という面白そうな事をしたいと思う。しかし公の機関になるとなかなかできない。「なんでそこのお店なのだ」という理由・説明があるんですよね。お金をかけようとするときに難しくなってしまう。ところがそこにNPO、第三セクターをかませると、それはそちらでやっていただいて結構です、という話になる。愛知埋文の職員が現地説明会に合わせて何か別のプロジェクトをやるうとして、彼らもこれをやりたいのだ、ということがあるのだけど、それを一緒になってやっていく組織があると実現ができる。本当は

自分の職場で、市町村で、博物館でこんな面白い事をやりたいのです。でもできない。それが実現できるかもしれない組織がNPO かもしれません。

吉田 岡安さんからはドラッカーの視点から見た「まいぶん」の話をしていただきました。ご紹介されたようにドラッカーには『非営利組織の経営』という本があって、私も非常勤講師として博物館経営論の授業を担当していた時に紹介しました。『非営利組織の経営』の中で重要なことは二つあって、リーダーシップとミッションとされています。文化遺産に関するNPO について、結局のところお金の出所は行政からで、今までと同じではないかという話がありますが、お金の使い方は大事だと思っていて、今の赤塚さんの話を聞くと、かえってNPO を間に挟む方が、リーダーシップを発揮できるのかな、と感じたのと、仕事の倫理として、神が見ている、という意識の話が岡安さんからありましたが、ドラッカーの本も最後の方は自己啓発的な感じになっていきます。ミッションというのは元々布教する、伝導するという意味があります。行政組織の問題点は色々感じる事があって、大学事務もそういうところがあり、彼らは誰に見られているのだろうと考えた時に、世間から見られている、あるいは同僚から見られているという意識なのではないか。ミッションという考え方が、今の日本社会になじむのかどうか、ということについて、何かコメントがあればお願いします。

岡安 光彦（以下、「岡安」） 違うことを話そうと思っていました。ミッションのことは後回しにさせてください。

赤塚さんは今でも行政にいますが、NPO でやっていることは行政にいてもやれたのではないかと、そういう声があります。ドラッカーは、必ず第二の人生を用意してなくてはいけないよ、と言います。それも現役でいる間に第二の、第三の人生を用意しなさい、と説きます。現役の時にできなかったことを思いきりやれるように、現役の時に予行演習としてやっておきなさい。赤塚さんは多分、ドラッカーを全く読んでいないと思いますが、ドラッカーが言っていたことを見事に実践していると思います。おそらく、民間企業から見ても赤塚さんは優秀な行政マンですが、であるがゆえに、歯痒かったり、イライラすることがあって、それをやれる場所はどこか、それを自分で考えて準備していたのだな、と思いました。ミッションはちょっと考えさせてください。

ジョン・アートル（以下、「アートル」） お二人の話はとても参考になりました。私は考古学者ではなく、文化人類学者で、日本の考古学はどのように作られているか、どのように人々にとって意味があるのか、をテーマにしています。赤塚さんの話を聞くと、能登半島でまちづくり活動を研究していたことを思い出します。私がフィールドにした鹿西町には雨ノ宮古墳があって、杉谷チャノバタケという「日本最古おにぎり化石」が出土した弥生時代の遺跡もあった。まちづくり活動としておにぎりの里と

いうことにしておにぎりフェスティバルをしたり、そこでミスおにぎりコンテストを開いたりしていました。そこで面白かったのは、過去の日本で一番古いというのは現代でも一番、ということにして、日本最大のおにぎりを作ることに毎年挑戦していた。

遺跡、遺構、遺物というのは、発掘調査でもってデータ化するのが通常の流れですが、そのデータをどう使うか、という時に、「物語」というのが一つ大事なポイントだと思いました。二人とも、物語をキーワードとしていた。「さよなら、まいぶん」というのは「まいぶん」というのはどのように終わるのか、またはこれからは希望があって、「次世代のまいぶん」がどのように始まるのか、そういう形で考古学自体をストーリーとして考えているので、現代の社会で意味があると感じました。赤塚さんの話に出てきた、どこかの集落のおじいちゃんが「喋りたかった」というのが一つのヒントかと思う。というのは、先ほどのおにぎりの里について、その町の人にどう思うかと聞くと、ほとんどの人が「あまり気にしていない」と答える。「その最古のおにぎり化石も見たことないし」という感じ。まちづくり活動の中で、最初はそれほど関心はなかったが、やっているうちにそれが個々の経験として作られ、物語が個人個人で作られるようになった気がする。遺跡との関係で、個人、またはグループとしてどういう人であるかを語っていけるような、そういうポテンシャルがあれば考古学は意味がある、というのを二人の話から感じました。

岡安 ミッションの話をお忘れなうちに。私は40代になって初めてセコム系の企業に入って、ドラッカーの話をお聞きしました。その時聞いた話で石切り工の話を紹介しました。第一の男は「これで暮らしを立てているのさ」と答え、第二の男は手を休めずに「国中でいちばん上手な石切りの仕事をしているのさ」と答え、第三の男は、その目を輝かせ夢見心地で空を見あげながら「大聖堂をつくっているのさ」と答えた。つまり、ビジョンを示した。ドラッカーの話の要点は、君はどの石切り工になるのか、という問いです。先ほどの物語の話ですが、赤塚さんはビジョン、物語があって、おそらく行政では描ききれないビジョンや物語を描きたいということで、次のビジョン、物語を自分で用意された、ということだと思う。

それで、マイナーな話になりますが、私も日本の考古学に飽きてしまった。例えば日本の考古学者がどんな話しているかということ、岐阜県のなんとか古墳から出てきた甲冑の何番目の鉾留めの曲がり具合と、韓国のなんとか洞古墳から出てきた鉾留めの曲がり具合がものすごくよく似ていて、どうのこうの、という話をしている。確かに、プロフェッショナルとしてはそういう議論ができないといけな。ただ、さすがに飽きてしまって、もう少しグローバルな、ユニバーサルな話がしたいなと思って弓矢のことを今は追いかけていて、太平洋を横断した航海者たちが、東は南米まで、北は日本までロングボウを運んだのではないかというアヤシイ話をしています。やっぱり、面白い物語じゃないと、やっていて面白くないです。やっている本人が面白くないと。多分、赤塚さんは今、面白くてしょうがない。もう赤塚さんは、この何年間は埋文セ

ンターの仕事しているのかな、という感じで、NPOのことしか話をしない、という感じですよ。

吉田 赤塚さんに関するそういった噂はですね、私にも聞こえてきたりはしています。ところで、赤塚さんがお話の最後で、「あなたはどこの国津神の民ですか」という問いかけをされましたが、赤塚さん自身のご出身はどちらですか。

赤塚 犬山です。生まれたところに戻ってきたという事でしょうか。

吉田 犬山に生まれて、大学はどこか余所に行ったけども。

赤塚 あちこち旅しましたけども、結局戻ってきました。自分の故郷にです。

吉田 今後は、自分が生まれた土地ではないが、ある場所を選んで、という人も増えてくると思います。先ほどの岡安さんが示された埋文関係の若手の立場というのは、期限付きの囑託の立場の人が多くて、流動しないといけない現状があるわけですから、どこの国津神の民になるかは赤塚さんのように第二第三の人生の構想を持ちつつ、全国を転々とするのもありなのかな、と思ったりしました。元気でやっていればいつかは自分の国津神と思うところに定着できるかもしれないですね。

岡安 今の若手の研究者はあっち行ったりこっち行ったりしています。民間に行ったり行政に行ったり、囑託だったが九州から突然縁もゆかりもない関西に行ったりします。そういう人たちの場合、つまり一つの国の国津神に仕えられない場合は、赤塚さん風に言うと海洋民の神様を祀ればいいのです。ノマドの神様を。

赤塚 僕の問いかけの根本は、そうですね。自分が生まれ育った場所、今住んでいるところ、その場所の本質を知りたい。話はズレますが、実は邪馬台国、女王国のトップリーダー卑弥呼に逆らった国がある。卑弥呼という男の王様に率いられた**狗奴国**という国が**東海地域**にあったという話を、ここ数年ずっとしています。真剣に、真面目に。その理由は、いつも文化は畿内という中心から広がっていく考え方が定着しているが、そうではないのだと言いたい。それもあるかもしれないけど、それを受け入れる前に、自分の足元、皆さん方が育った、あるいは今住んでいる場所の確認から出発してほしい、そういう意味です、どこの国津神か、という問いかけは。メジャーな

*下部にある註は吉田泰幸による
狗奴国という国が東海地域にあったという話 赤塚氏はこのテーマで講演会をすることも多いとの

ことだが、書籍としてまとめたものは、例えば赤塚 2009。

天津神ではなく、地域の神。それを奉ってきた歴史から出発したいという事です。金沢であれば金沢という地から、歴史を研究している人は、もちろん歴史を語ってもらいたい、金沢の。風土を研究している人は風土を、建築をやっている人は建築を、という形で、地域にもともとある、長年培ってきた何者から、出発してほしい。そういう意味です。

吉田 赤塚さんが何かの文章で、世間師について書かれたことがありました。世間師というのは日本の民俗学者の宮本常一が書いた話で、昔の人は自分が生まれ育った土地にずっといる人が大半ですが、たまに変わった人がいて、各地を周遊して村に戻って来たりして、何か困ったことがあると村人はその人を頼ったりする。そういう存在が世間師と呼ばれていた、ということです。今あちこち行かなきゃいけない人はそういう存在を目指せばいいのかな、とも思いました。逆に外を見てきた人だから、その土地の良さが分かるということもあるのではないのかな、と。そういう話の方が、希望があるかもしれません。

赤塚 本音を言いますと、僕は和歌山の、奈良教育大学に行っていました。奈良県に住み、**檀原考古学研究所**で多くの勉強を学びました。友達もです。その頃はここそが全てだと、日本の歴史そのものだと。愛知県の小さな古墳なんかどうでもいいという気持ちでした。それが帰ってきたら、人間の心なんていい加減なもので、今はその絶対逆を考えている。だからいろんなものを見て、若い頃は経験して、というのがいいんじゃないかな、と思いました。いかにいい加減か、お恥ずかしい。

安芸 早穂子(以下、「安芸」) 先ほど赤塚さんが、ずいぶん身体的なことをおっしゃったと思います。自分と土地との関係から生まれる「言語風土」と言ったようなことをお話しになった。人と土地との関係については、特に日本は会社が転勤を命じるようになって、ずいぶんかき回しましたから、これが大変なことになってしまいました。

宮本常一 (みやもと・つねいち) 渋沢栄一を祖父に持つ財界人・渋沢敬三の支援で日本各地のフィールドワークを行なった民俗学者。民具学の提唱(1979)、離島振興策への関与など、多様な業績で知られる。「世間師」の挿話は『忘れられた日本人』(1984)に見ることができる。

檀原考古学研究所 正式名称は奈良県立檀原考古学研究所。末長雅雄氏を所長として1951年に設立されたが、研究所のウェブサイト「檀原考古学研究所は、2008年9月13日に創立70周年を迎えました」の一文があるとおり(URL:

<http://www.kashikoken.jp> 2017年2月7日にアクセス)、研究所のルーツは1938年の紀元二千六百年記念行事である檀原神宮外苑整備事業に伴う檀原遺跡の発掘調査にある。邪馬台国畿内説に関わる重要遺跡である纏向遺跡、壁画の保存公開が話題となっている高松塚古墳、ファイバースコープによる石棺内調査がマスメディアにも報じられた藤ノ木古墳、多量の三角縁神獣鏡等が副葬時に近い状態で発掘された黒塚古墳の調査など、著名な遺跡、古墳の調査を数多く手がけている。

自分がいる土地を身体で感じる、というのは、知識だけではなくて、例えば漁師が漁場のことを、四季を通じて変化する漁場のことを知っているというのは、縄文時代の漁師は Google Earth などは持ち合わせてないわけだから、土地を俯瞰しているわけじゃない。だけど、平面上で変化している谷なり山なりの春夏秋冬というものを自分の中でアーカイブしている。それを「彼らは身体のアークイブを持っている」と私は呼んでいます。すごく柔軟なアーカイブ。そしてこういう人たちはそのアーカイブを書き残すのではなくて、語って残してきたと思うのです。物語として残してきた。身体的な土地の記憶を伝える物語です。そういうものを忘れずに新しい物語という形に取り込んでいくことで、例えば地域なり人なりに戻していけると思います。その成果を、最終的な成果を戻すのが地域の人であるとすれば。

今日の話は赤塚さんの話も岡安さんの話もどちらも刺激的で面白かったのですが、私の立場から提案させてもらえるのであれば、岡安さんがおっしゃったチームの中の「報告書を超えるアーカイブ」とスライドには出ていましたが、その報告作成の過程にスペシャリストとして、アーティストというか、芸大出身者を入れて欲しいのです。これはかねてから、みんなに言っています。研究者と表現者が「チーム」で働く形は、これから本当に大事なことになると思っています。一方、芸大出身者は最近すごく増えています。公立の芸大があちこちにできていて、各県が特色ある表現者を育てる場となっていくはずですよ。そういう芸大の今がある。彼らは研究者とは異能だし、感じるフィルターを持っている人たちなので、彼らを入れることでビジョンが広がるし、自分たちが思っている以上のことを付け加えてくれる人たちです。赤塚さんのスライドで芸大出身で粘土の指導している人が出ましたが、ワークショップに限らずあらゆる場面で、そういう人たちが口を挟める、ゆるかなメディウムとしてのアーティストを付け加えていただくことで、思わぬ方向に運んで行ったり、広がったりすることがあると思うのです。ぜひ、チームメンバーを採用するときには芸大卒業の人を考えていただくと嬉しいな、と思っています。

岡安 今、芸術家の話が出てきましたが、私の知り合いの哲学者で、専門は近代ヨーロッパ宗教学ですが、考古学が大好きな人がいます。彼が発掘調査中の遺跡は美しい、なんで美しいと感じるのか、これを考古学者たちだけに独占させておくのは勿体無い、それで、哲学者なのでなぜ美しいか論理にしてくれる、非常にわかりやすい文章にしてくれます。なるほどなあ、それで美しいのかと。確かに発掘している人間だけにこれを独占させておくのはもったいないが、どうすればいいんだろう、と。その辺も NPO が関わっていくといいかもしれない。役所だと色々面倒くさいです、勝手に現場に入れられないとか。NPO が発掘の主体になってくると、もう少し地域社会

公立の芸大があちこちにできていて 秋田公立美術工芸短期大学が4年制大学の秋田市立美術大学に移行した事例などを指すと考えられる。

の中で、発掘しているプロセスの美しさをみんなで共有できるようになるかもしれないです。それは哲学者だけでなく、芸術家も含めて。

安芸 哲学はもう一つの大きな可能性だと思います。繋ぐ役割、メディウムとして。しかもシャープな言語化ができる人というのがいなければ、最終的に伝えることができないですから。

岡安 そうです、鋷の曲がり方の他も大切なことがある

アートル 私は話の中で疑問に思ったことがあります。お二人は遺跡の多様な利用方法、解釈の方法、ディスプレイの方法を推奨していきたいと理解しましたが、それと考古学的な発掘の段階での標準化、プロフェッショナルによる分業化、脱アマチュア化、というのは私にとっては結びつかない。標準化というのは、これは何なのか、というのを標準化する、データを標準化するものと考えると、その後のどう語るのかに関係してくる気がする。標準化というのはその後の多様性を邪魔してしまうのではないかと感じましたが。

赤塚 僕の言っている標準化はあくまで、基礎データです。どこの地域でも確実に出てくる遺構記号とか、土器の座標情報を必ず入れるとか、そういう基本的なところだけ統一しましょうね、という話なのです。その遺跡をどう評価して、そこから広げてどういう物語を語るのか、比較研究していくためにはあらゆる情報が標準化されていないと、逆におかしな方向に行くのではないかと懸念があるので、科学的な情報をまずはきっちり押さえておいて、そこから標準化された情報を共有しつつ、個別分散的な研究を進化させることができると思います。

山岡 拓也（静岡大学。以下「山岡」） 今の話と関係することだと思いますが、少し違う角度から質問させていただきます。今日は埋蔵文化財を調査する体制が難しくなっていてそれをどのように転換するかということと、埋蔵文化財をどうやって活用して役立てるか、という話だったと思います。前々から疑問に思っているもあまり口に出せなかったことですが、どこからが埋蔵文化財なのでしょう。例えば、埋まっていたらすべて埋蔵文化財なのでしょう。遺跡を発掘していて、ごく最近の茶碗の欠けらなどが出てきたら、これは攪乱だからといって捨てちゃうこともあります。あるいは、遺構だとしても、本当は人工的なものかどうかわからないものを調査していて、結局人工的なものであるのかははっきりわからなかったものもあると思います。発掘の量を捌けなくなっているという状況がある中で、どこからを埋蔵文化財とするのかという線引きも重要なように思うので、そのあたりのお考えを聞かせていただきたいです。

岡安 例えば、現時点で東京都の場合は江戸時代の生活の痕跡は遺跡としてカウントしていません。地域、行政によって違いがあって、どこを中心に遺跡として考えているかに違いがある。東京都の場合は江戸の五府内、ここまでが江戸だよ、街の中だよという領域がありますが、その範囲の中では江戸時代までを遺跡として扱い、行政的に発掘しないといけないことになっている。それから神奈川では宝永の大噴火というのがあって、たくさん火山灰が降りましたが、その火山灰が積もっているところまでが（江戸時代でも）遺跡で、それ以降は遺跡じゃない。当時火山灰がすごく降って、それが邪魔なので大きな穴を掘って埋めるのですが、民間企業による発掘の場合、最初からいくらでやると決めますから、その穴にぶつかると大変なことになる。とんでもない量の火山灰を掘らないといけない。それは余談ですが、各地域によって大体線引きがされている、奈良の平城京だと、中世の遺跡は出てきても多分思い切り飛ばしている。線引きは各地域の行政のその時の判断で変わってしまう。大体どこもガイドラインを作っていると思う。

赤塚 「埋蔵文化財」というのは行政用語ですから。文化庁は、とりあえず中世までは調査しましょう、それ以降は地域の特性に合わせて対処しなさい、金沢市だったら金沢城は、この地域にとって重要な遺跡ですからもちろん調査の対象にしましょうね、と行政的にはなっていると思います。ただ、そうはいつでも、おっしゃるように線引きは難しいと思います。考古学のデータというのは、木の根の痕かもしれない穴が一直線に並んでいる情報や、雑多なものが一緒に出てくる。歴史的に意味があるものも、誰かが蹴飛ばした石ころなんかとか、そうでないものもごっちゃに出ているのです。それが考古学の現場です。そこから、一つ一ついかに評価していくのか、現場に求められている。

山岡 お聞きしていて、実際のところどこからが埋蔵文化財であるのかという基準を決めるのは容易ではないと感じます。それで、突き詰めて考えると、こういう新しいことがわかるからとか、最低限こうした情報を残しておいた方が良いとか、研究に資するかどうか基準になるのではないかと個人的には思っています。私は行政で埋蔵文化財の調査をした経験がほとんどないものですからこのように考えていますが、研究との関わりという点ではどうでしょうか。

赤塚 埋蔵文化財は行政用語ですから、開発によって破壊される遺跡調査の中で生まれた言葉です。学術的な調査では山岡さんがおっしゃることが中核になるかとは思いますが。

岡安 もともと発掘調査は学術調査しかなかったのです。イギリスの人がメソポタミアに行って掘ったり、いろいろしていました。日本でも、もともと学術調査しかなかっ

た。法隆寺で火災があった前後に、日本で国土開発がものすごく盛んになってきて、文化財保護法ができてきますが、そうなってくると研究に役立つかどうかはわからなくても国民共有の財産としての遺跡があって、それをほっとくわけにはいかないので、記録だけでも残しましょう、となった。本当は遺跡の価値は掘ってみないとわからないし、掘っただけでも研究しないとわからない。しかし壊すのを「待って」と言っていると国の発達は遅れてしまう、立ち行かないので、壊しましょう、ただし壊しても記録だけは後世に残しましょう、という趣旨で（埋蔵文化財の）発掘調査はしているので、学術的な判断はしていない、というより、できないのです。

山岡 ただその（埋蔵文化財の）システムは難しくなっているわけですよね。それで岡安さんが提案された専門家集団でやりましょうというのは素晴らしいと思いますし、それができたら理想的ですが、仮にできた場合でも、その場合は、量をこなすのは難しいように思いますし、質の高い調査をやるときには対象は絞らないといけなくなるのではないかと、思うのですが、いかがでしょうか。

岡安 私がプロフェッショナルでやりなさい、昔のやり方やめなさい、と言っているのはそういう発想とは逆で、人もいない時間もない、でも上手に発掘しようと思えばできる。なぜダメかというと、昔ながらの調査の水準と仕組みでやっているのだから立ちいなくなっている。会社の中でもよく、やれるかやれないか、という議論の仕方をする人がいますが、そうするとすごく怒られる。やれるかやれないかじゃない、どうしたらやれるか、そういう話をしろ、と上司に怒られます。やれるかやれないか、ましてどうしてやれないか、という話は聞きたくない。やらなくてはいけないのだから、この人とお金と時間でどうやったらクリアできるか、そういう話をしよう、その延長で今日の話が出てきたのです。

アートル 私が指摘したかったのは、お二人の話は発掘調査が終わって街づくりが始まるという印象を受けましたが、まちづくりは発掘調査の前でも後でも進行していますよね。発掘調査の時にはいい調査をするためにいいメンバーを揃えて、医者モデルで、ただし患者としての遺跡があって、その中でどういう作業をするのかということには、何かコンテキストがあるはず。そうすると街にとって発掘をするのは何の意味があるか、それはデータをとって標準化だけではなくて、発掘を始める時にそれがどういう意味を持つのか、発掘が終わったらどうするのか、そういう議論がある中で、そのプロセスにアーティストを入れていくのはいいと思います。私は客観性の考古学もさることながら、主観性の考古学をもっとやりましょう、という気がしないでもない。ミッションというのは考古学者のだけでなくまちづくりのために考古学を取り入れて、街にとってどういう意味がある、それは人の育成でもあるし、その街にとっての物語を作る、そういう力を考古学は持っていると思う。

安芸 赤塚さんはそう言ったことをおっしゃったのではないですか。

岡安 それに関連して、関西の事例で、ある電鉄会社が宅地開発を始めたのですが、その真ん中に大きな池があって、池の周りに5～6世紀の埴輪を焼いた窯や工房がいっぱい残っていたのがわかって、行政と電鉄で話し合っただけでそこは全部残すことにしました。それで国の指定史跡にして、住宅地の真ん中に巨大な国の公園ができて、復元されたアトリエ、工房の跡、真ん中には池がある、そういう風にして都市計画の中に巨大な遺跡を取り込んだ。そうすると住宅群の中に遺跡公園がある、それが電鉄会社にとっては住宅を売り出すときにプラスアルファの価値になった。そういう誰も損しなかった事例もあるので、地域に密着したNPOが発掘調査にも関わるようになると、開発の話、まちづくりの話があったときに、遺跡だけではなくて、街並みをどうしよう、あの蔵は壊されちゃうらしいけど、市民の力でなんとかならないか、などそういった問題に芸術家や哲学者が参加してもいいのですが、もっと幅広い目から見たまちづくりになっていくと思う。赤塚さんは多分、それを目指されているのではないかと思います。

アートル それは分かります。ただ、そうした理想と、標準化、プロフェッショナルとが繋がらない。例えば、羽生淳子先生が子供の時に自分の家の裏庭に遺跡があって、それを掘ったりしたのが考古学に関心を持ったきっかけだった、と言います。そうしたきっかけは標準化とプロフェッショナル化の中では生まれにくい気がする。子供が庭で自由に掘るといふようなこともない。

赤塚 それはやり方次第だと思います。私のNPOで今やっているのは、ある小さな地区で、ある小学校さんと町内会の皆さんも含めて、地元の人たちと一緒に分布調査をやっています。畑を持っている地主さんにも参加してもらって、畑に入らせてもらって、子供達も私どもも一緒になって、土器を拾うわけです。遺跡があるかないかを探していくのです。探し方と土器の拾い方と、それをどういう風に街の中で位置づけていくかを、みんなで学びながら。そうすると、子供達が自主的に土器を見つけてマークしたり、その街についての知識がだんだん増えて行く。自分たちの街がどういう街なのか、そしてどういう地形の上にあるのかわかってくるので、それはうまくまちづくりとか学習に結びつけばいいと思います。

アートル ああ、それはすごくいいですね。

住宅群の中に遺跡公園 ここでの事例は大阪府高槻市の史跡新池ハニワ工場公園のこと。

岡安 標準化というのはがんじがらめにしてこの中に入れなさい、ということではなく、最低限のことを決めて、みんなが後で困らないようにしましょうという話です。例えば、道路の幅を何メートル以上にしましょう、線路の幅は何ミリ、何センチの誤差に収めましょうとか、そういうことです。列車のデザインは勝手にすればいいのですが、幅だけは決めておきましょう。フランスはメートルという標準を作った国なのに、TGVの列車を新しいのにする時に、列車の横幅もスタンダードがあるはずなのに、それより大きいものを作ってしまった。それで試走車一台が駅に入ったら横幅が大きすぎてプラットフォームにぶつかってしまって大騒ぎになって、数百カ所の駅を削るか、電車を設計し直すかしないか走れないという話になって、結局駅を新しく標準化した。そういうことにならないように、どんなデザインをしてもいいが、最低限の幅を決めておきましょう、そういう話です。

吉田 今のジョンさんと赤塚さんのやりとりというのは、私の紹介の仕方も悪かったのかもしれない。調査された古墳の管理が前面に出ているような紹介の仕方でしたが、実際は今お話しされたように、発掘があってその前後にプレ・ポスト発掘があるとすると、そのプレ発掘の部分も活動もNPOでやっている、ということですよ。

赤塚 そうです。

吉田 そうすると、後々は発掘自体もNPOで、ということになるかもしれないですね。

赤塚 究極的には、遺跡の評価とか、調査するかしないかも、地域住民が決めていくことです。そこにはある程度のルールは必要ですよ、勝手に調査すればいいと言っているわけではない。ではなくて、これまでは全部行政が、ここは遺跡だ、調査しましょうという形で一方的に決めてきているので、なかなか地域の人たちの心の中に落ちていかない。成果も遺跡も。そうではなくて、分布調査の段階から、遺跡の評価の段階から、果ては遺跡の名称から地域の人たちが関与していけるシステムになれば、と。昔はそうだったはずなのです。それを取っちゃって、行政が一方的に取り上げた。確かに高度成長の時はそうせざるをえなかったと思います。それをもう一度戻す、ただ戻すのではなくて、より良い方向に整理していく手続き的にも。時間はかかると思いますがね。

岡安 福島県のある町で、お城の一部にコーヒーハウスを作ることになって、考古学者たちは全国から集まって、ダメだと言っている。ところが地元の人はいいいじゃないかと言っている。地域に密着したNPOができて、そこがコントロールするようになれば、当然、発掘調査の時にはいろんなプロフェッショナルがやるが、最終的には地域で決めていけばいいので、エライ人がああだこうだと言って決まるのではなくなる、

ということです。ただし、法律もあるしスタンダードもあるので、何をやってもいいわけではない。逆に、これは壊そうとなった時に、これは大切だから壊さないで、という話にもなるのではないか。

赤塚 ちょっと話の方向が違ってきちゃうかもしれませんが、私どもが管理・運営者になっている青塚古墳の史跡公園ですが、私どものNPOが運営する前に、犬山市が直営で10年間ほどやってきたのです。その時に、何をしたかと言うと一人のおじさんが身をもってこの公園を守っていたのです。遺跡を、公園を。どういう風にしてたかというと、雑草、膨大な草の管理も、公園ですから、朝来るとゴミは落ちている、犬のフンは落ちている、夏になると花火も落ち、ゴミは散らかし放題、そういう公園でした。それを毎日毎日の繰り返しの中で、ここは国の史跡公園だから、ごめんなさい、犬の散歩はごめんね、と訴えながらやってきた。まさにゴミと犬のフンと雑草との戦いです。僕も最初にこの公園の運営に関与することになった時に、引き継いだ時に、その時はそうだったのか、とも思った。

しかしある時、地域の集会があって、夜にその集会に呼ばれて、私が説明に行った時に、全く予想外のことを地域の住民の方に言われました。それは、昔、ここの古墳は我々地域のものが守ってきた。そのとおりなのです。地域の人たちが草を刈ったり、山焼きをしたりして古墳を守ってきたのです。そうした歴史がある。だけども、史跡整備で、国なり市が取り上げて、史跡公園にした、だから地域の人たちはあの公園には、立ち入ってはいけない、触れてはいけない公園だと認識している。だから誰も行かんよ、と言われた。その時、僕はカーンと、頭を殴られたような気になりましたね。そこからです。出発点はこの一言でした。そうではないな、地域の人と一緒に、その場所を作っていく、この場所はこういうところだということを知っていただいて、一緒にやっていく。そのことがない限り、何もできないな、と思いました。だから、考古学の発掘調査の現場も、同じ事じゃないかと思うのです。地域の人と一緒に、ともに活動する。この場所はこういうところだと。そうやっていくと、自然にゴミを落とす人も少なくなる、何か公園でいろんなことをやろうとすると、周りの地域の人が見てくれて入る。見えない目が見てくれている。ゴミを落とす人は極端に少なくなってきた。そういう風になっていく、という気がします。時間がかかります、難しいです。

吉田 時間も少なくなってきたので、会場の方からと思うのですが、どうでしょうか。

河村 好光 今日は、大変分かりやすい話で、ずいぶん共感する部分もありました。

考古学者たちは全国から集まって、ダメだと言っている 相馬中村城跡カネボウ跡地に予定されている相馬市民会館建設について、日本考古学

協会が遺構保存を求める要望書を提出している(2011年12月26日)。

時間もあまりないということなので、僕の意見はひとまず置いて、今、一番大事にしていること、一番喫緊の課題は何か、それをお聞きしたい、お二人に。

赤塚 正直言って資金不足です。うちは職員がいて人件費が支出の多くを占めます。普通は企業さんから、民間から資金をいただいて動かすのが理想ですが、市場から資金をいただく手立てがなかなか出てこない。本当はそれをやらなきゃいけない。だから多くのNPOなり市民団体は何をやっているかという、補助金・助成金頼り、もっと言ってしまうと、行政の下請け的な部署になっている。安く、リタイアした人を活用して公園管理する。安いのが当たり前になる。そんなのばっかりです。必要経費もほとんど理解してもらえない。これだと全然よくならない、そこに若者が集まってこない。若者たちがアメリカのNPOみたいに、きちんとした生活の場になるようにしていきたいのですが。そのためには、市場から資金を集める方法なり、仕組みなりを積極的に進める事が重要です。これはある程度行政的な枠組みを作っていたらかないと難しいかもしれない。そこが正直、苦労しています。何か妙案があったらご教示お願いします。

岡安 個人的には世界一長い弓の秘密を解きほぐしたいな、と思っています。栃木人としては、自分の所属している企業も、業界全体も、あまりにも非近代的な発掘をやっている、もう少し近代的な仕組みができるように、頑張りたいと思っています。

吉田 岡安さんの話の中でも、アメリカはNPO大国みたいなことを言っていました、ジョンさん、そうなの？

アートル いやあ、アメリカはNPO大国ですよ。仕組みはそれほど知らないのですが、聞いた話では、日本とアメリカのNPOの違いは、寄附する側の税金の関係ですよ。

吉田 寄附税制の違いというのは、よく聞きますよね。

赤塚 寄附がもう少しやりやすい形で、寄附した場合何パーセントか、あるいは100パーセント控除とか、寄附しないとその企業のイメージが悪くなるという風潮とか、そういうのが日本の中で一般化し、広がりを持つといいです。市場からNPOへお金

寄附税制 1998年の特定非営利活動促進法の施行以後は、日本においてもある程度は寄附に対して優遇措置がなされた税制になっているとされる一方で、寄附の規模や寄附金優遇税対象団体の数はアメリカやイギリスと比べて大きな差がある。日本において寄附者に対する税制上の優遇措置が

あるのは「認定NPO」のみで、その数は少ない。日本の寄附の現状、寄附文化が根付かない背景は、例えば以下の資料で考察されている。
URL: http://www.tax.metro.tokyo.jp/report/tzc20_4/05.pdf (2017年2月7日にアクセス)

が、あるミッションを立ち上げてそのミッションにお金を出資する。一部ではクラウドファンディングを利用したり、オンパク手法など、動き始めてますね。

アートル というのは、今そういう形になってない、ということですか。

赤塚 ほとんど、難しいです。

アートル そうなんですか。例えば私が100万円を寄附しようとして、税金は払わなくていいとか。

赤塚 寄附金控除はどうだろう。

岡安 そこはだいぶ遅れていると思います。ドロッカーは、寄附は第一歩と言った。次にその仕事を担う人をなんとかしようという順番。

赤塚 結局、みなさん補助金・助成金頼みになってしまいます。そうするとなんらかの下請け的な状況になってしまう。補助金、助成金は麻葉みたいなものです、やり続けないと動かなくなり、最悪です。

吉田 一回りしてミッションの話に戻ってきたのかな、と思いました。どういうミッションを寄附される側が作るかというのと、お金出す側も「神が見ている」のでミッションとしてお金出さなければ、としないとお金も回らないかな、と思います。

アートル じゃあ締めましょう。吉田さん、何かよろしく。

吉田 どうやって？みんなで大きな声で「さよなら、まいぶん」と言うとかですか。

赤塚 僕、「まいぶん」好きですけど、変えていかないと、立ちいかなくなる。それ

オンパク手法 オンパクは「温泉泊覧会」の略語。温泉で著名な大分県別府市の地域復興策の手法をモデル化したものがオンパク手法と呼ばれている。

URL: <http://japan.onpaku.jp> (2017年2月7日にアクセス)

噴火湾文化研究所 伊達市噴火湾文化研究所。北黄金貝塚公園を軸にしたまちづくり活動を発端に

2005年に設立された伊達市立の研究所。北黄金貝塚に代表される縄文時代だけでなく、伊達市内のアイヌ文化、近現代の文化まで、様々な文化の掘り起こしと活用を目的に掲げている。現在は研究所内に「埋蔵文化財調査室」があるようだが、活動紹介において埋蔵文化財の用語はあまりみられない。「まちづくり」がキーワードとして頻出する点では、赤塚氏の主張に近いものがある。

はみんな知っている、気づいているはず。だったらみんなで変えていくか、立ち上がるか、潰すか。でも現実はそんなに簡単じゃないですよ、NPOも市民団体も含めて。特に継続が難しい。なかなか上手くいかない、でも誰かがやらないとはじまらない、みなさんも立ち上がっていただけるとありがたいと思います。

岡安 ありがとうございます。

吉田 北海道の伊達市に噴火湾文化研究所というのがあって、10年以上前にそこを訪れたことがあります。当時、大島直行さんという方が所長で、定年後もその所長になったはずですよ。私が博士論文の調査で北海道を回っていた時に、今思えば無謀だったというか、いきなり研究所を訪ねて話をお聞きしたことがあります。そうしたら、突然来たにもかかわらず施設全体を丁寧に案内してくれました。その時聞いた話では、噴火湾文化研究は博士号を持っている人しか職員として採用しないなど、構想を語っていました。印象的だったのが、埋蔵文化財という言葉を使わない方針だ、と言われたことです。大島さんが言うには、文化財という言葉自体がすでにわかりにくい、それに埋蔵がついたらさらにわかりにくいから使わないと言っていました。赤塚さんのNPOの名前も文化「遺産」となっていて、おそらくここに「文化財」という言葉を使わないのには、一定の理由があると思います。なので、そういう意味でも今日は「さよなら、まいぶん」ということで。